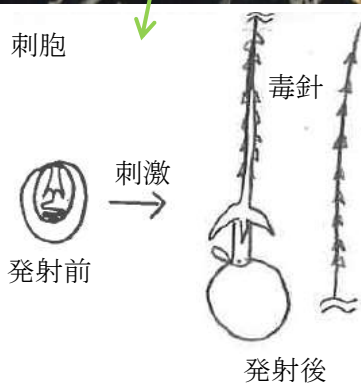
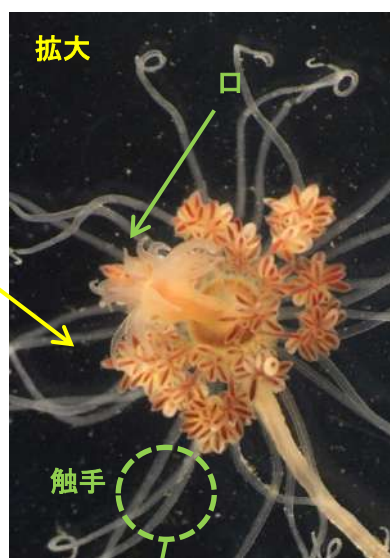
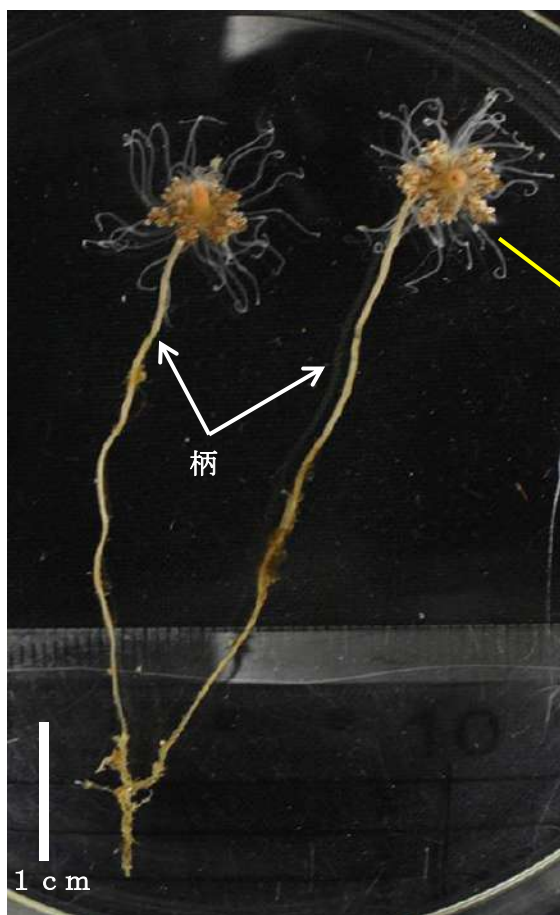




冬は海が荒れ、人の立ち入りを拒む日本海ですが、3月になって天気の良い日が多くなりはじめました。この季節になると、海も穏やかになります。まだ寒いですが、水面下には、魚たちで賑わう夏の海とは全く違った風景が広がります。今回は、冬から春にしか姿を現さないヒドロ虫とウミウシの話をしたいと思います。

冬の海に咲く小さな花-ヒドロ虫-

「ヒドロ虫」という生物は、あまり聞き慣れないかもしれませんが、中学の理科の授業で「ヒドラ」について習った人がいるかもしれません。ヒドラは淡水性のヒドロ虫の呼称で、ギリシャ神話の「ヒュドラ」という9つの首を持ち、高い再生能力を持った大蛇の名前に由来すると言われています。ヒドラは何本もの触手が生え、柄の部分から別のヒドロ虫が発芽したり、切ってもそれぞれが再生することで有名な動物です。



「ヒドロ虫」の多くの種は海に棲んでいます。ヒドラのような高い再生能力をもった種は一部です。ヒドロ虫の触手には、毒があり、これに触れると「刺胞」と呼ばれる微小なカプセルが刺激され、毒針が発射されます。これを用いて小さなプランクトンなどを捕らえたり、外敵から身を守るような生き方をしています。

ちなみに、クラゲも人を刺しますが、これもクラゲの触手にある刺胞の毒針によるものです。クラゲやヒドロ虫の多くは触っても痛みを感じるほどではありませんが、一部の種では激しい痛みや痒みを引き起こすので、素手で触れないことが大事です。

海産ヒドロ虫の一種 ベニクダウミヒドラ

刺胞：刺激を受けると毒針を発射するカプセル。触手に大量に含まれていることが多い。

荒れやすく、魚も少ない、一見寂しい印象を受けてしまいますが、特殊なスーツを着て水中に潜って海底を観察したり、漁港の縁に生えた海藻を見てみると、小さな花のような生物が沢山付着しているのです。実は、水温の低い海こそ、ヒドロ虫がよく見られる季節なのです。

ヒドロ虫を食べるミノウミウシ

しかし、ヒドロ虫にも天敵がいます。それはウミウシの仲間の、「ミノウミウシ」(蓑海牛)です。冬が過ぎ早春の頃から、ヒドロ虫の出現の後を追うようにして、ミノウミウシたちが海底の所々で見られるようになります。ミノウミウシ類は、多様な色や形のミノを持つことから呼ばれており、多くの種はヒドロ虫を専門的に食べます。山陰海岸でも3月頃から多くのミノウミウシが見られるようになり、ある種は黒いミノを背負った色、ある種は春を告げる桜のような色など、様々です。



早春頃から浦富海岸の海底に出現するミノウミウシの仲間 大きくても2cmほど。 写真提供 ブルーライン田後

しかし、その美しいミノは飾りではないようです。私がミノウミウシを触ろうとすると、ミノを広げて丸まるような行動をとるのです。そのミノは指にくっついたり、すぐにウミウシの体から剥がれてしまいます。実はミノには、ヒドロ虫から奪った刺胞が仕込まれているのです。近くにいる魚も食べようとしません。ミノウミウシの仲間は、ヒドロ虫を餌とするだけでなく、ヒドロ虫の捕食や防衛で使う刺胞をも利用するのです。これは「盗刺胞」と呼ばれています。

そんな無敵とも言えそうなミノウミウシ達にも更に天敵がいます。それは、アカボシウミウシです。ウミウシを専門的に食べるウミウシも何種類も存在しており、山陰海岸沿岸ではミノウミウシが沢山出現する頃にアカボシウミウシも沢山出現します。このような光景を見た私は、人知れず水面下にも、小さな生物たちの激しい生態系ピラミッドが成り立っていると実感しました。(太田)



アカボシウミウシ (左) がゴマフビロードウミウシ (右) にかぶりついている様子

ウミウシ講演会のお知らせ

冬から早春に出現するミノウミウシの仲間は、スキューバダイビングではよく観察されていますが、名前の付いていない種が多く存在し、鳥取県で未確認のウミウシも少なくありません。4月9日~4月13日に山陰海岸沿岸で、ウミウシの専門家を招聘してウミウシ類の調査を行います。また、ウミウシの講演会を行う予定ですので、是非お越し下さい♪ 色とりどりのウミウシも限定展示します…!

日時：平成31年4月14日(日) 10:00~12:00

場所：岩美町立渚交流館 町民ギャラリー

(鳥取県岩美町牧谷690-20)

その他：参加申し込みは不要です。直接会場にお越しください。

